

畫家の從軍日記(二)

(黒田清輝氏)

氏が戰地の風物を描く傍ら書い附けし日記、一種の頭腦美術家の眼光を以て從軍中の有様を記せしなれば面白き節多し、左に威海衛に向ひて金州出立の頃よりの分を掲ぐ、氏は山本芳翠氏と共に始終新聞記者と征旅を共にし、此金州出立の時は讀賣の越智修吉、時事の堀江卯之助、大坂朝日の天野皎、國民の古谷正恒、九州日々の矢島篤政、万朝の原田慶次郎、大阪毎日の大久保慎一、山本芳翠の諸氏及び我社の林政文氏同行十人、榮城灣に到りて茨城の記者榮城に着してメールの頭本元貞氏、虎山に到りてより國民の久保田米齋氏時事の杉氏一行に加はりしと日記中替名の多くは此等諸氏の中にてお互に呼び居たる綽名なり、其心して讀まるべし、

一月十七日 金州城

此間から待に待つた行軍もいよく明日と爲て來た、關帝廟の脇で今朝一圓で買て來た駱駝の毛氈を切抜て防寒用の手袋もこしらへねばならず、又荷物一片附けて管理部に預ける用意もせねばならず、急に中々いそがしく爲つた、オレがちよいと能く針仕事をするもんだから皆がオレに裁縫從五位だなんて名を付けあがつた、隣部屋の於傳君がオイ君此れはどうぬつたらよからうなんかんで、縫物の相談にやつて來るなどは随分面白い話さ、

同日 金州城
大連灣

金州には一と月半も居たけれども、土地の人に知り合が出来たと云譯でないから土地になさげはちツともかゝらず、さらば立つぞと云ふ時に爲て只氣になるのはパイの事計りサ、オレなどが行て仕舞ツたあとであの犬はどう爲るだろう、さぞ淋みしがらう、事に依つたら無情な人夫や何かにたゞき殺されて仕舞ふかも知れない、立つて行く時にはいつもの様に水溜めの向ふの日當りのいゝ處に寝て居ツたが、オレなんかの出掛けるのを見て若しついで来ては大變だから、隣のぢいを頼んでジツト押へさして置き、其内にいそいで外に出て、直に内から門をしめて貫つた、一駄パイといふ奴は妙な奴で、天鐵翁などの話に、旅順攻撃の時は從軍して出掛たそうだが、途中で人夫や兵卒に逐たくられてよんどころなく金州へ逃げ歸つた戦がすんで一同が再び金州へ引返して來た時には非常によろこんだそうだ、夫れから皆に付て居て少しも離れず、食物も粟をやめてとう／＼米をくふ様になり、オレなんか一寸散歩にでも出掛ると直にあとから飛で來る、第一不思議千萬な事には留守番をして居る時でも支那人が來れば直にほへ付く、何にしろ支那人が大きらひと云のだから不思議さ、金州の邊では今度金持の支那人などかいくらも歸化したけれども此の犬程心から日本人に爲て仕舞た奴は有るまいと思ふのだ、

オレ等の仲間は總躰で十人だが、内五人丈は乗船の都合かれこれの手續をする爲に朝の内に立ち、残りの五人はあとの片附方などして晝めしを食てから立ツた、柳樹屯迄の途中は至て無事、只山砲老が帽子をどこかに落して仕舞つた丈、柳樹屯に着く少し前に氣がついて見れば振り頭、之れは防寒の爲に毛革の被物を澤山被込だったので歩

いて暑く爲り、途中で帽子をぬいで休んだが、頭も帽子も其儘別々に爲て仕舞つたと見へる、

柳樹屯に来て見たら、九州君が兵站部の入口に出迎て居て呉れて兵庫丸に乗り込むと云事が知れたア、久し振でいゝ寝臺に寝て、少しは甘いものが食へるだろうと内々慾心を起しながら乗ツて見たら、軍人外の者其の這入る處と云ものは、上等や中等ぢやない、又下等でもない、馬の入る處が三頭分計明いて居るので、其處に藁を布き、同行十人が先づ鐘詰同然、お隣りの滿州馬の尻の臭さには、さすがに天下の耳目だなどと威張て居る我々の連中も大に閉口、今日こそは金筋の一本でも付けて居たらと思ツたに違ひなし、飯さへ運んで呉れる人が無いので、伊登古君等と炊事場に頭を下げ、辨當を貰つて歸り、手桶の茶をのみ寝ることゝした、馬の野郎が何かぼりく、食ひながら横目でオレなどの轉ろがつて居るさまをいやに見て居る、其面を下からながめながら眠むる、こんな洒落は又とは出来ぬ全く戦さのお蔭だ、

丁度日の入る頃に船は大連灣の外に出た、

『毎日新聞』明治二十八年三月七日